

November 30, 2025

希望の神 ルカ 1:76-79

1:76 幼子よ、あなたこそいと高き方の預言者と呼ばれる。主の御前を先立って行き、その道を備え、

1:77 罪の赦しによる救いについて、神の民に、知識を与えるからである。

1:78 これは私たちの神の深いあわれみによる。そのあわれみにより、曙の光が、いと高き所から私たちに訪れ、

1:79 暗闇と死の陰に住んでいた者たちを照らし、私たちの足を平和の道に導く。

一、生きた希望

ナチスがユダヤ人撲滅を図ったとき、身の危険を感じたユダヤの人々は国外に逃げましたが、それができなかった人々は、『アンネの日記』にあるように、隠れ家に息をひそめて生活し、戦争が終わるのを待ちました。そんな隠れ家にいても、ユダヤの人々は過越祭を祝いました。過越祭にはキャンドルを灯して、「来年こそはエルサレムで！」と挨拶するのが慣わしになっていました。国を失った人々が、もういちどエルサレムに帰り、そこで過越を祝う日がかならずやって来る、そんな希望を、キャンドルの灯火で表したのです。ある隠れ家では、キャンドルが無かったため、父親がバターを燃やしてキャンドルの代わりにしました。それを見た子どもが、「お父さん、もう、バターはそれしかないのに、食べないで燃やしてしまうの？」とバターを惜しみました。そのとき父親は言いました。「人はバターが無くても生きていける。しかし、希望なしには生きて

いけないのだよ。」その通りです。物質的には必要なものが満たされているのに、希望がないために、人生を生き生きと生きられないでいる人が多くいるのです。

希望なしには人は生きる力を失います。ある人がこう話していました。「以前の私は、何の希望もありませんでした。まだ20代なのに、まるで70代の老人のようでした。」70代の人が聞いたら気を悪くするかもしれませんが、希望が無いことは、人から「若さ」を失わせると言っているのです。逆に希望にあふれている人は80歳になっても、90歳になっても、「若さ」を保つことができます。その人は続けてこう言いました。「けれども、イエス・キリストを信じて、私は`生きた希望、を与えられました。」その人が開いた聖書は、ペテロ第一 1:3 でした。こうあります。「私たちの主イエス・キリストの父である神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせ、生ける望みを持たせてくださいました。」神がくださる希望は、「生ける望み」、生きている希望、人を生かす希望なのです。みなさんも、キリストを信じて、希望を与えられたとき、まるで若返ったように感じませんでしたか。若返ったどころか、神の子どもとして新しく生まれたのですから、新生児にまで戻ったのです。赤ちゃんほど、命にあふれているものはありません。神は、イエス・キリストを信じる者を生まれ変わらせ、その人に新しい人生を与えてくださいます。また、その人生の日々に希望を与えて、生かしてくださるのです。神のくださる希望は、じつに「生きた希望」、人を生かすもの、私たちのうちに生きて成長していくものなのです。

二、変わらない希望

また、神のくださる希望は、決してなくなりません。残念なことに、希望を持つのをあきらめている人が多くいます。「希望を抱いたが実現しなかった。期待した通りにはならなかった。なんども失望し、落胆した。そんなことなら、希望を持たないほうがよい。」そう考えているのです。しかし、それは、目に見えるものに頼り、そこに望みを置いてきたからかもしれません。目に見えるものはかならず移り変わります。株の価値も、為替のレートも、オイルの値段も、何もかも変わります。政治も右に揺れ、左に揺れます。今まで人間がしていたことをロボットや AI がするようになって仕事を失う人も出ています。職業も変化していきます。変わってゆくものに望みを置いて、やがて失望する時が来るでしょう。

しかし、変わらない神に望みを置くなら、決して失望することはありません。聖書は、「今の世で富んでいる人たちに命じなさい。高慢にならず、頼りにならない富にではなく、むしろ、私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置き、…」(テモテ第一 6:17)と教えています。「神に望みを置く」のは、神には、それを実現してくださる恵みと力があるからです。人に望みをかけても裏切られることがありますし、団体や組織に期待しても、その組織が、最初は良くても腐敗して悪くなっていくこともあります。しかし、神に望みを置くなら、その希望は失望に終わることはありません。

ローマ 5:1-5 には、神のくださる希望が、決して失望に終わらないことが、次のように書かれています。

こうして、私たちは信仰によって義と認められたので、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持って

います。

このキリストによって私たちは、信仰によって、今立っているこの恵みに導き入れられました。そして、神の栄光にあずかる望みを喜んでいます。

それだけではなく、苦難さえも喜んでいます。それは、苦難が忍耐を生み出し、

忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと、私たちは知っているからです。

この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。

「この希望」、私たちが神に置く希望、神が私たちにくださる希望、それは決して失望に終わりません。患難があっても、くじけません。むしろ、それは忍耐を教え、忍耐によって、希望がもっと大きくなるのです。真実な神は決して私たちを失望させることはなさらない。このことをしっかり覚えておきましょう。

三、神の言葉による希望

では、神はこの希望をどのようにして私たちに示し、与えてくださるのでしょうか。それは、神の言葉によってです。きょうの箇所は、祭司ゼカリヤが妻エリサベツとの間に生まれた男の子に「ヨハネ」と名付けたとき、聖霊に満たされて語った言葉です。このヨハネはのちに「バプテスマのヨハネ」と呼ばれ、救い主イエスが来られる直前の預言者となりますが、ゼカリヤは、そのことを前もって語って、こう言いました。「幼子よ、あなたこそいと高き方の預言者と呼ばれる。主の御前を先立って行き、その道を備え、罪の赦しによる救いについて、神

の民に、知識を与えるからである。」（76-77 節）聖書でいう「預言」は将来を予告し、言い当てる人ということだけではなく、それは、神の言葉で人々を教え、神について正しい知識を与えることを言います。

紀元前 586 年、エルサレムがバビロンによって神殿もろとも破壊され、ユダヤの人々は国を失いました。ペルシャの時代に神殿が再建され、人々は囚われの地から帰ってきましたが、ペルシャの後、シリアやマケドニアに支配され、バプテスマのヨハネやイエスが生まれた時代には、ローマの支配のもとにありました。本来はダビデの子孫によって治められるはずのユダヤの地は、ユダヤ人でさえない、エドム人のヘロデとその子どもたちの領地になっていました。ユダヤの人々は、何百年にもわたって、大きな国々に支配されてきましたが、それでも人々は救いの希望を保ち続けました。たとえ国が滅びても、土地を失い離散しても、民族として滅びることはありませんでした。それは、ユダヤの人々が「聖書の民」と呼ばれるように、神の言葉を持っていたからです。神の言葉は人々の希望の源でした。

苦しい時代が続くと、民衆は「世直し」を願うものです。外国の支配を打ち破り、世の中の不正を正し、公平な社会を作ってくれる人物が現れることを期待します。ユダヤでは、「自分こそ救い主だ」と言ってローマに反抗した人たちもありました。そういった人たちはみな、現れては、すぐに消え去り、人々に救いを与えるどころか、ローマにユダヤへの圧迫の口実を与え、人々をもっと苦しめました。神の言葉が与える正しい知識に基づかないで行動したからでした。紀元 70 年にエルサレムがローマによって滅ぼされたのも、人々が神の言葉を正しく受け取らなかったからでした。ヨハネの役割は、77 節にある

ように、「罪の赦しによる救いについて、神の民に、知識を与える」ことでした。イエスが教えられたのは、「罪の赦しによる救い」であって、ユダヤの政治的独立ではありませんでした。イエスが宣べ伝えた「神の国」は、ユダヤ人が軍事力で世界を支配するなどといった幻想に基づくものではありませんでした。ヨハネは、やがてイエスが教え、成し遂げられる救いについて、人々が正しく知り、理解できるよう、道備えをしました。神の言葉を正しく知ることによって、人は「幻想」や「空想」ではなく、本物の「希望」へと導かれるのです。

神の言葉が希望を与える。それは、現代もまったく同じです。救い主イエス・キリストは来られ、救いを成し遂げられました。私たちは、天に国籍を持ち、神の国の国民になりました。すでにイエス・キリストによって神の国に入れられています。しかし、たましいの救いはあっても、からだの救いはまだです。信じる者たちの中に神の国はありますが、まだ世界は神の国となっていません。信仰者も、さまざまな苦しみや災いに遭います。痛みや悲しみを体験します。しかし、そのつどそこから立ち上がります。苦しみを乗り越えて前に進むことができます。前に進むのもそうですが、天により近づき、上にも登っていくのです。イエス・キリストの救いをさらに深く、身をもって体験するのです。それは、神の言葉が与える希望によるのです。

詩篇 130:5 に「私は主を待ち望みます。／私のたましいは待ち望みます。／主のみことばを私は待ちます」とありますが、最後の文、「主のみことばを私は待ちます」は、口語訳では「そのみ言葉によって、わたしは望みをいだきます」となっています。英語でも “in his word I hope” と訳されています。神

の言葉が希望の力だということです。ペテロ第二 1:19 は、こう教えています。「また私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜が明けて、明けの明星があなたがたの心に昇るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。」神の言葉、それは、私たちから希望をはぎとろうとする暗闇の中でも、希望の光を与えてくれます。

アドベントに灯す最初のキャンドルは、「預言のキャンドル」と呼ばれ、「希望」を表わします。キャンドルの灯火は蠟を溶かし、燃やして輝きます。そのように、希望は神の言葉を燃料にして輝きます。きょうの箇所、78-79 節に、「これは私たちの神の深いあわれみによる。そのあわれみにより、曙の光が、いと高き所から私たちに訪れ、暗闇と死の陰に住んでいた者たちを照らし、私たちの足を平和の道に導く」とある通りです。神の愛、あわれみが、暗い世に光を、希望の光を照らしてくれるのです。

四、希望の神

しかし、神の言葉が暗い時代にも灯火となって、私たちに希望を与えるとんでも、その神の言葉を聞くことがなければ、また、それを正しく知ることがなければ、人々は希望を持つことができません。ヨハネが、まことの光である救い主イエスを指し示し、証しする者となったように、人を生かす希望、失望に終わらない希望を、神の言葉によって受けている私たちは、その希望によって生かされることによって、人々に、ほんとうの希望を証ししていきたいと思います。

そのためにも、ローマ 15:13 にある「どうか、希望の神が、信仰によるすべての喜びと平安であなたがたを満たし、聖霊の

力によって希望にあふれさせてくださいますように」との祈りを自分の祈りとして祈りましょう。そこでは、神が「希望の神」と呼ばれています。私たちが、失望したり、落胆したりするときも、私たちに希望を与え、立ち上がらせてくださるのは神です。神は希望の神。この神に希望の光を求めましょう。それが、私たちを困難から救い出します。そして希望を失っている人々に、希望を見つける助けを与えるのです。

（祈り）

父なる神さま、あなたは、希望の神です。私たちは、自分のためにも、他の人のためにも祈ります。「どうか、希望の神が、信仰によるすべての喜びと平安で、私たちを、また、あなたがたを満たし、聖霊の力によって希望にあふれさせてくださいますように。」私たちの祈りに答え、私たちが常に、喜び、平安、希望に満ちて生きることができるよう、助けてください。イエス・キリストのお名前です。